

古代出雲の東と西二題

一 問題の所在

大化前代における出雲の政治史を語るとき、しばしば東部と西部の問題がひきあいに出される。しかしながら、本稿で東と西といっているのはそのことではなく、黄泉国と国譲りという二つの神話の各々にみられる東と西の問題である。

黄泉国とは、死者の世界であるが、『古事記』や『日本書紀』の神話、すなわち、記・紀神話では、出雲の東部とされている。けれども、記・紀とほぼ同じ八世紀前半に在地の出雲で編纂された『出雲国風土記』では、黄泉国への入口が出雲の西部に設定されている。

このように、黄泉国をめぐる、記・紀と『出雲国風土記』とは、まったく逆というか、異った場所をみるこ

瀧 音 能 之

ができる。なぜこのようなことが起きるのかについては、従来、歴史学の分野からはあまり積極的な見解がだされていないようにみられる。

また、国譲りに関しても、記・紀では出雲大社からほど近い現在の稲佐浜が神話の舞台とされている。位置的には、島根半島の西端にあたる。しかし、『出雲国風土記』においては、出雲の東部の意宇郡母理郷に国譲りの記述がみられる。したがって、国譲りに関しても出雲の西と東でおこなわれていることになる。これに対しても歴史学の分野からは、明確な理由づけはなされていないように思われる。

これらの問題に関しては、史料の違いによるものとすることは簡単であるが、その意味について考察することもまた重要ではなかるうかと考える。ちなみに問題点を図にすると第1図のようになる。以下、私見を提示して御教示を

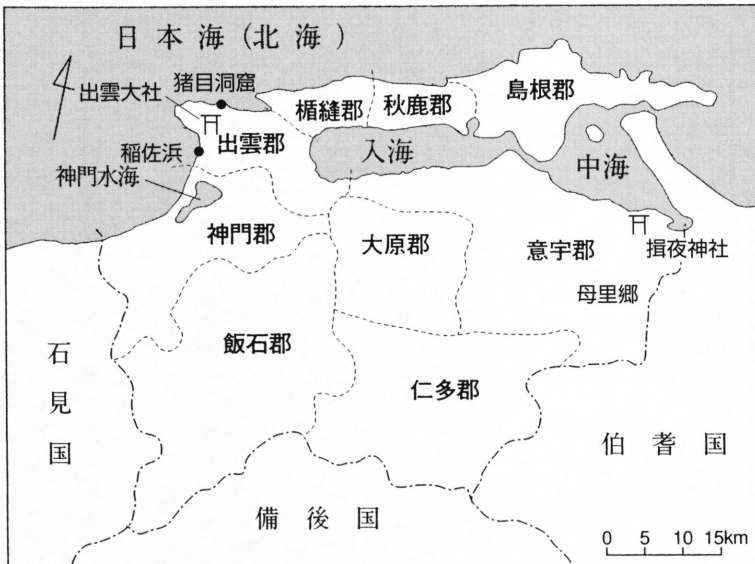
仰ぎたいと思う。

二 二つの黄泉国

まず、黄泉国について考えてみたい。『古事記』をみると、故尔、伊耶那岐命詔之、「愛我那迹妹命乎。那迹二字以音下效此。」
謂レ易三子之一木二乎。乃匍三匍御枕方、匍三匍御足方二而哭時、於三御涙二所レ成神、坐三香山之畝尾木本一、名泣澤女神。故、其、所三神避二之伊耶那美神者、葬下出雲國与三伯伎國二堺比婆之山上也。^①

と記されている。これは、イザナキとイザナミによる神生みの場面で、火神のカグツチを生んだイザナミがついに死んで葬られるところである。すなわち、亡くなったイザナミについて『古事記』は出雲国と伯耆国の境にある比婆山に葬られたと記されているのである。

このあとの記・紀神話の展開をしばし追うならば、妻を失ったイザナキは、カグツチを斬り殺して、イザナミのいる黄泉国へと向かう。そして、イザナミと対面したイザナキはもう一度、現世へもどることを切望するのである。しかし、黄泉国の食物をたべてしまったイザナミは、もう黄泉国からもどれないといい、それでも黄泉国の神と相談するのでその間、決してのぞかないでほしいといいわたす。約束に同意したイザナキであるが、どうしても待ちきれず、



第1図 出雲の東と西関係図

そつとイザナミの姿をのぞいてしまうのである。そこでみたものは、死者となった醜い妻の姿であつた。さすがのイザナキも驚きあわて、急いで逃げ出すことになる。それを知つたイザナミは、恨み怒りイザナキを追いかけてくる。やつとの思いで黄泉比良坂（泉津平坂）までたどりついたイザナキは、千引石で坂路を塞いでしまう。『古事記』では、その場面を次のように描写している。

最後、其妹伊耶那美命身自追来焉。余、千引石引_二塞其黄泉比良坂_一、其石置_レ中、各對立而、度_二事戸_一之_レ時、伊耶那美命言、「愛我那勢命、為_レ如_レ此者、汝國之人草、一日絞_二殺千頭_一」。余、伊耶那岐命詔、「愛我那迹妹命、汝為_レ然者、吾一日立_二千五百産屋_一」。是以、一日必千人死、一日必千五百人生也。故、号_二其伊耶那美神命_一、謂_二黄泉津大神_一。亦云、以_二其追斯伎斯_一。此三字以_レ音。而、号_二道敷大神_一。亦所_レ塞_二其黄泉坂_一之石者、号_二道反之大神_一。亦謂_二塞坐黄泉戸大神_一。故、其所_レ謂黄泉比良坂者、今、謂_二出雲國之伊賦夜坂_一也。

ここからも知られるように、黄泉比良坂は、この世とあの世とを結ぶ坂ということになる。そして、千引石をはさんで、この世側のイザナキとあの世側のイザナミとの間で問答がおこなわれる。その内容は、イザナミが、イザナキの

民を一日に千人殺すという、それに答えて、イザナキは、それではこちらは一日に千五百人の民を産むというものである。

この坂を『日本書紀』は、泉津平坂と表記し、どこか特定の場所をさすわけではないとしている。しかし、『古事記』では、黄泉（比良）坂と表記し、さらに、出雲の伊賦夜坂とも記している。現在、島根県の東部に揖夜という地名が残されており、イザナミを祭神とする揖屋神社が鎮座している。また、この神社から東方へ少し行ったところには、黄泉比良坂の伝承地とされるところもあつて石碑が建てられている。この伝承地に関しては、もとより伝承地というものの以外何物でもないが、揖屋神社に関しては、古代の伊布夜社、揖屋神社にあたるとされている。すなわち、八世紀初めの天平五年（七三三）に成立した『出雲国風土記』の意宇郡の神社記をみると、神社官社のひとつとして伊布夜が記載されている。したがつて、伊布夜社は、すくなくとも八世紀のはじめには、すでに官社と認められた神社であつたことが確認できる。さらに十世紀初めにまとめられた『延喜式』の神明帳にも揖屋神社として載っており、引き続き官社とされていたことが知られる。

これらからみて、伊賦夜、伊布夜、揖屋はいずれも古代地名と考えられ、ほぼ同一の地域をさしているとみて大過

ないであろう。もとより、記・紀にみられる黄泉国に関する記述は神話という次元での話であるが、ともかくにも『古事記』では、出雲の東部を黄泉国への入口ととらえていたといつてよいと思われる。

出雲の東部を黄泉国と関連させる考えでは、イザナミを葬った場所の問題もみのがせない。イザナミが火神であるカグツチを生んだ結果、死んでしまうわけであるが、『日本書紀』の第五段の第五の一書では、紀伊の熊野の有馬村に埋葬したと記されている。³¹ところが、『古事記』では、出雲と伯耆との境にある「比婆之山」に葬られたことになっている。この比婆山については、現在、出雲地域内に限っても、東部の能義郡伯太町の比婆山をはじめ、十か所以上の伝承地がある。これらのことをふまえると、少なくとも『古事記』においては、出雲が黄泉国と密接な関係があるとされていることが理解できる。その理由については、早計に論じることができないが、古代人は乾の方角、すなわち、西北に死者の国があると考えていた、という三谷栄一氏の見解があり、³²大変、興味深い。この説ののちとつてとらえるならば、記・紀神話の中で、出雲系の典型的な神とされるスサノオやオオクニヌシが共に死者の国である根国と深い関係をもっていることもうなずけるのである。

スサノオの場合、父神であるイザナキから海原を支配す

るように命じられたのに、それに従わず、母神のイザナミのいる根国へ行くことを願つて泣き叫び、ついには父神の怒りをかうことになる。また、出雲で八岐大蛇を退治したのち、根国へ去ったという伝承も持っている。一方のオオクニヌシはというと、兄神である八十神からの迫害を避けるために、スサノオの支配する根国へ行くことになる。そこで、スサノオの娘神であるスセリビメと出会つて、愛しあうようになり、スサノオが出す数々の試練を二人で乗りこえて地上へもどり、ついには八十神を追放してしまうのである。その後、国土の開拓を成し、地上の王となるが、その地上を高天原に譲り、自らは幽界へ隠れるのである。

こうしたスサノオやオオクニヌシの行動も出雲が黄泉国と深い関係をもった地域とするならば、違和感なく受け入れられるのではなからうか。さらに、出雲と黄泉国との関連性ということに注目して、地元の出雲でまとめられた『出雲国風土記』をみるならば、黄泉国への入口とされている黄泉の坂・黄泉之穴の記載があることに目がとまる。しかし、不思議なことに、『出雲国風土記』にみられる黄泉の坂・黄泉の穴の場所は、出雲の西北部なのである。つまり、『古事記』にみられるイザナミの埋葬地や黄泉比良坂（伊賦夜坂）が出雲の東部であることを考えると、まったく反対の場所ということになる。

『出雲国風土記』における黄泉坂・黄泉の穴の具体的な記載は、出雲郡の宇賀郷の条にみられる。

宇賀郷 郡家 正北一十七里廿五步 所_レ造_二天下一大

神命 諤_二坐神魂命 御子 綾門日女命_一 爾時 女神

不_レ肯 逃隱之時 大神伺求給所 是則此郷也 故

云_二宇賀_一

即 北海濱有_レ磯 名_二腦磯_一 高一丈許 上生_レ松

芸至_レ磯 里人之朝夕如_二往來_一、又木枝 人之如_二攀

引_一 自_レ磯 西方有_二窟戸_一 高廣各六尺許 窟内有_レ

穴 人不_レ得_レ入 不_レ知_二深淺_一也 夢至_二此磯 窟之

邊_二者必死_一 故俗人 自_レ古至_レ今 號_二黄泉之坂 黄

泉之穴_一也

これが宇賀郷の記載であり、郷名由来をのべたあと、日本海に面した腦磯の西方に岩窟があることが記されている。その高さとは共に六尺とあるから、約二メートルほどの大きさということになるか。その中は穴になつてゐるが、人が入ることができないため、奥行がどのくらいあるのかは不明といつてゐる。そして、このあたりにきてゐる夢をみると、その人は必ず死ぬというのである。そこで、土地の人は昔から今にいたるまで、ずっと黄泉の坂とか黄泉の穴とかといつてゐる、という伝承である。

この宇賀郷の岩窟に相当するのは、現在の猪目洞窟遺跡

であるとされている。内容から明らかのように、当時の地元の人々は、この岩窟が黄泉国へ通じていると思つて、恐れていることがわかる。

このように、『出雲国風土記』にも黄泉国へと続く黄泉坂・黄泉穴がみられ、出雲と黄泉国の関係は十分に認めることが可能である。大きな問題は、こうした黄泉国への入口が、『古事記』では出雲の東部とされたのに対して、『出雲国風土記』では、出雲の西北部になつてゐることである。この問題をのりこえる手段として、『古事記』と『出雲国風土記』とが、それぞれの視点に立つて書かれてゐるかという場の考察を提起してみたい。『古事記』は、いふまでもなく、中央政府によつてまとめられたものである。それに対して、『出雲国風土記』は、在地の出雲で成立したものである。といふことは、『古事記』は大和を中心として、日本全体を視野にいれてゐるのに対して、『出雲国風土記』は出雲地域を対象としてゐるということができよう。このことを、乾の方角、すなわち西北を死者の国と考える古代人の感覚にあてはめると、『古事記』の場合、大和からみて西北にあたる出雲が、とりもなおさず、死者の国となる。そして、その入口はといふと、山陰道の出雲の入口、つまり、伯耆との国境といふことになる。つまり、出雲の東部に相当する。それに対して、『出雲国風土記』の

場合、出雲地域の西北が死者の国、すなわち黄泉国となるわけであるから、その場所は、島根半島の西端あたりとなるわけである。したがって、出雲郡の宇賀郷に黄泉坂・黄泉穴の伝承があったとしても、さほど不思議なことではないと考えられる。こうしたことを図にすると、第2図のようになる。

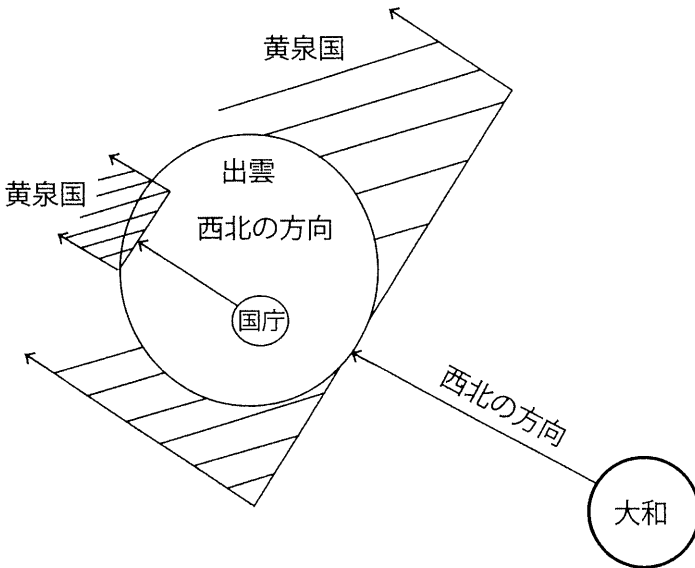
出雲の東部と西部の二か所に黄泉国への入口があるという、一見すると奇妙な話も、『古事記』と『出雲国風土記』のそれぞれの性格を考えれば、不思議なことではなく、むしろ、必然といってよいのではなからうか。

三 二つの国譲りの舞台

次に国譲りの舞台についてとりあげて考えをのべてみたい。

記・紀神話を通してみると、そこにはさまざまな意図がみえかくれするが、やはり、究極的には、天皇家の日本列島支配の正統化のために体系的に作られた神話群といえるであろう。個々の神話には、必ずしもそのような意図はないにしても、全体的にはそうした目的に向かって作られているといえる。天地開闢から始まって、ウミサチヒコ、ヤマサチヒコにいたるまでが神話で語られ、それらの神話群が次の神代天皇とされる神武へとつながっていく。こうし

た壮大な流れを編纂者は明瞭に意図していると考えられる。記・紀神話は質・量ともに豊富であるが、それらの中でも、最も重要な場面は、やはり、国譲りとそれに続く天孫



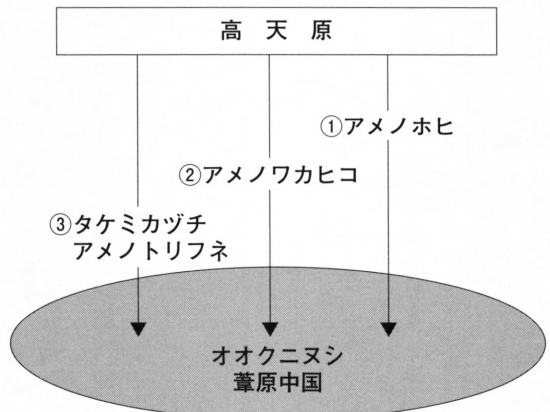
第2図 大和からみた黄泉国と出雲からみた黄泉国

降臨の場面といつてかまわないであろう。この場面は、オクニヌシが作りあげ支配している葦原中国、すなわち、日本列島を高天原のアマテラスに譲りわたし、それをうけて高天原からアマテラスの孫であるニニギが天降ってくるというものである。

そして、ニニギの子孫の中から神武天皇が誕生するわけであり、このことはとりもなおさず、天皇家が神代からすでに日本列島の正統な支配者である、ということを主張しているのに他ならない。

こうしたことから明らかなように、国譲り神話・天孫降臨神話は、記・紀神話の中核をなしているといつてよいであろう。

それでは、国譲り神話について、具体的にみていくことにする。『古事記』と『日本書紀』とでは、細かい点においては違いがみられるが、大筋ではおおよそ同じといつてかまわないと思う。いま、『古事記』によつて、国譲り神話をみるならば、第3図のようになる。まず最初にアマテラスが日本列島は自分の子であるアメノオシホミミが支配する国であると宣言する。そこで、アメノオシホミミが、高天原と地上の間にある天の浮橋に立つて見たところ、地上はとて騒々しい様子で、とても天降りなどできそうにない所であるといつて、高天原へ戻つてしまい、アマテ



第3図 『古事記』の国譲り

ラスにそのことを報告する。そのような地上の状況に対応するために、タカミムスヒがアマテラスの命をうけて、天の安の河原に八百万の神を集めて相談することになる。その結果、アメノホヒが地上に派遣されることになるが、アメノホヒはオクニヌシにとりこまれてしまい、三年間、高天原への報告を怠つてしまふ。

こうしたアメノホヒのふるまいに、高天原側はしびれを
きらしてしまい、二番目としてどの神を遣わしたらよいか
ということになり、その結果、アメノワカヒコが派遣され
ることになる。しかし、アメノワカヒコもオオクニヌシの
娘であるシタテルヒメをめとり、自分が地上の支配者にな
ろうとして八年間も高天原への連絡を怠ってしまふ。そこ
で、高天原では、ナキメという雉を天降らせて様子をみさ
せたところ、ナキメはアメノワカヒコによって射殺されて
しまふ。さらに、ナキメを射ぬいた矢が天の安の河原にま
で届いてしまふ。矢をみて不思議に思ったタカミムスヒが、
その矢をとって地上に向かって投げ返したところ、矢はア
メノワカヒコの胸に当たり、アメノワカヒコは死んでしま
う。

こうしたことを経て、アマテラスは、次にどの神を地上
に送つたらよいかと神々にはかかったところ、最終的にはタ
ケミカツチにアメノトリフネをつけて遣わすことになる。
『古事記』によつて、具体的にみるならば、

於_レ是、天照大御神詔之、「亦遣_三曷神_一者吉。」。余、
思金神及諸神白之、「坐_三天安河_二之上_一之天石屋_二、名伊
都之尾羽張神、是可_レ遣。伊都二字
以_レ音。若亦非_二此神_一者、
其神之子、建御雷之男神、此應_レ遣。且其天尾羽張神
者、逆塞_二上天安河之水_一而、塞_レ道居故、他神不_二得

行。故、別遣_二天迦久神_一可_レ問。」。故余、使_二天迦
久神_一問_二天尾羽張神_一之時、答白、「恐_レ之。仕奉。然、
於_二此道_一者、僕子建御雷神可_レ遣。」。乃貢進。余、天
鳥船神、副_二建御雷神_一而遣。

是以、此二神降_二到出雲國伊耶佐之小濱_一而、伊耶佐三
字以_レ音。
拔_二十掬劔_一、逆刺_三立于_二浪穗_一、跌_三坐其劔前_一、問_二
其大國主神_一言、「天照大御神・高木神之命以、問使之。
汝之宇志波祁流此五字
以_レ音。葦原中國者、我御子之所_レ知國
言依賜。故、汝心奈何。」。余、答白之、「僕者不_二得
白。我子八重言代主神、是可_レ白。然、為_二鳥遊_一・取
魚_一而、往_二御大之前_一、未_二還來_一。」。故余、遣_二天鳥
船神_一、徵_二來八重事代主神_一而、問賜之時、語_二其父
大神_一言、「恐_レ之。此國者、立_二奉天神之御子_一。」。即
踏_二傾其船_一而、天逆手矣、於_二青柴垣_一打成而隱也。
訓_レ柴云三
布斯_二。

すなわち、タケミカツチとアメノトリフネの二神は、出
雲の稻佐浜に天降りして、オオクニヌシに国譲りを強く
迫つたところ、オオクニヌシは、自ら決定するのではなく
子神であるコトシロヌシに国譲りの諾否をゆだねてしまふ。
ところがこのときコトシロヌシは、鳥根半島の東端にあた
る美保へ行つていたため、アメノトリフネを美保へやつて

コトシロヌシをよびもどすことになる。そして、国譲りの諸否を迫ったところ、コトシロヌシは即座に賛成して、自らは海中に隠れてしまう。

すると、オオクニヌシは、自分にはコトシロヌシの他にもう一人の子神がいることを告げ、この子神、すなわち、タケミナカタにもきいてほしいという。すると、そこへタケミナカタが登場して、人の国へきて、こそこそ話をしているのは一体、誰だといひ放ち、力くらべをしようではないかといひ出す。

そして、いい終わるやいなや、タケミナカタは、タケミカヅチの手をとる。すると、その手は氷柱に変化し、さらに剣に変わる。タケミナカタはびっくりしてしまい、思わず尻込みをしてしまう。すると今度は、タケミカヅチがタケミナカタの手をとってたやすくこれを投げ飛ばしてしまふ。タケミナカタはたまたま逃げ出し、ついに信濃の諏訪湖で追いつめられて殺されようとするが、タケミカヅチに服従を近い、からくも死をまぬがれることになる。

タケミカヅチは出雲へもどり、オオクニヌシにタケミナカタが国譲りに応じたことをのべ、再度、国譲りを迫ったところ、さしものオオクニヌシも国譲りに応じ、最後に自らの住むところとして出雲大社の創建を要求し、そこに鎮座することになる。

以上が、『古事記』にみられる国譲り神話のあらましである。ところが、『古事記』と同じく奈良時代の前半にまとめられた『出雲国風土記』には、これとは異なつた国譲り神話が記されているのである。

母理郷 郡家 東南卅九里一百九十步 所_レ造_二天下_一 大_二神_一 大穴持命 越八口平賜而 還坐時 來_二坐長江

山_二而詔_一 我造坐而 命國者 皇御孫命 平世所_レ知

依奉 但八雲立 出雲國者 我靜坐國 青垣山廻賜而

玉珍置賜而守詔 故云_二文理_一

神龜二年
改字母理

これがそれであり、意宇郡の母理郷の条である。オオクニヌシが越の八口を平定してもどつてきたとき、長江山まできて、「私が支配している国は天孫に献上しましょう。ただ、出雲だけは、私が支配する国として玉を置いて守ることにします」と宣言したというのである。ここには、驚くことに記・紀の国譲り神話とはうって変わつて、積極的なオオクニヌシの姿をみることができぬ。

ここにみられる神話は、オオクニヌシが自分の国を天孫に譲ろうというのであるから、まさしく国譲り神話といつてよいと思う。『出雲国風土記』のこの神話は、分量的にもさして多いとはいえないが、この神話の中には、問題点がいくつも含まれているといえる。

まず、場所の問題があげられる。『古事記』の場合、タ

ケミカツチとアメノトリフネの二神は、稲佐浜に天降りして、オオクニヌシと国譲りの交渉をおこなう。この稲佐浜は、現在の出雲大社からほど近い海岸であり、ここが国譲り神話の舞台とされているわけである。つまり、出雲の西部が神話の舞台ということになる。

一方、『出雲国風土記』の場合には、母理郷が神話の舞台とされている。この母理郷は、出雲の東部に位置している。したがって、『古事記』の舞台とは、まったく正反対ということになるのである。

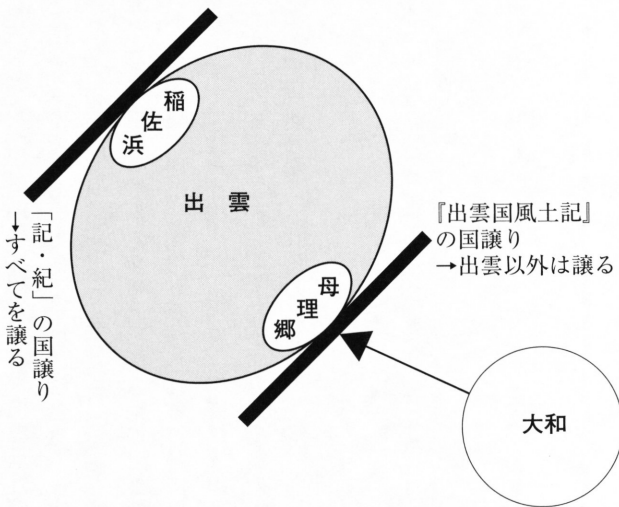
また、『古事記』では、オオクニヌシは葦原中国、すなわち地上のすべての地域を天孫に譲っているが、『出雲国風土記』では、出雲は国譲りの対象外となっており、オオクニヌシが国譲り以後も支配することになっている。

こうした相違点をどのように解釈したらよいかということが、当然のことながら問題になってくる。この点については、いまのところ定説といえるまでの考えは提示されていないようにみうけられるが、高天原と地上（出雲）という対立関係を大和と出雲という視点に置き換えてみるとわかりやすいのではなからうか。

つまり、大和からの国譲りの要求に対して、記・紀の場合には、出雲も含めてすべてを国譲りするというのであるから、大和からみて出雲の一番奥の西部にあたる稲佐浜で

国譲りがおこなわれることになるのである。

これに対して、『出雲国風土記』では、出雲だけは譲らないというのであるから、大和からみて出雲の入口、つまり、出雲の東部で国譲りが展開されるわけである。このことを図示すると第4図のようになる。



第4図 ふたつの国譲りの舞台

四 結語

以上、二点の問題をしぼって、『古事記』にみられる出雲に関連した神話を取り上げ、それらを『出雲国風土記』でみた場合に生じる差異と比較してみた。

まず、死者の国である黄泉国について、古代人は乾、すなわち西北の方角にその存在を想定していたといわれる。具体的には、古代人は出雲との関連を考えていたとされるが、その位置について『古事記』では出雲の東部と記している。しかし、『出雲国風土記』の中では出雲の西部に黄泉国が想定されている。この一見、矛盾しているようにみえる位置の問題も、どの視点からみるかということを明確にするならば、矛盾はしておらず、むしろ、必然と考えられる。すなわち、大和からみれば西北にあたる出雲の入り口である東部に黄泉国があることになり、出雲国内からみるならば出雲の西部にあることになるのである。

さらに、国譲り神話の舞台に関して、『古事記』と『出雲国風土記』とでは、出雲の西と東というようにまったく異なっている。しかし、この問題についても、両書の内容を注意深く読むならば、これもまた矛盾というよりも必然とすることができるように思われる。すなわち、『古事記』では、国譲りの範囲が出雲を含む地上のすべてであ

るのに対して、『出雲国風土記』では、出雲以外の地上を譲ることになっているのである。このことをふまえて、現実世界の太和と出雲との関係でみるならば、『古事記』の場合、出雲を含むのであるから大和から見て出雲の一番奥、すなわち、出雲の西部で国譲りがなされることになる。これに対して、『出雲国風土記』では、出雲は国譲りから除外されているのであるから、大和からみて出雲の入り口である東部で国譲りがなされるのである。

注

- (1) 西宮一民編『古事記』（桜楓社、一九八六年）三二―三三頁。
- (2) 右同書三六―三七頁。
- (3) 秋本吉郎校注『風土記』（日本古典文学大系、岩波書店）一一三頁。
- (4) 『日本書紀』（新訂増補国史大系、吉川弘文館）。
- (5) 三谷栄一『日本神話の基盤』（塙書房、一九八四年）。
- (6) 秋本吉郎校注『風土記』（日本古典文学大系、岩波書店）一八二頁。
- (7) 西宮一民編『古事記』（桜楓社、一九八六年）六九―七一頁。
- (8) 秋本吉郎校注『風土記』（日本古典文学大系、岩波書店）一〇二頁。